

対話理解のための理論的研究

——日本語の談話結合子の発話行為理論からの分析——

久 保 進

0. はじめに

本稿はケベック大 Daniel Vanderveken 教授との国際共同研究「談話論理・談話理解の解明のための理論的・対照的研究」の一部を構成する。筆者の担当は、対照研究で日本語の談話標識、特に対話・談話結合子の分析である。以下本稿では、日本語の代表的な談話結合子「だって」と「でも」に焦点を当て、発話行為理論の観点からの分析を紹介する。

先行研究においては、A、Bに見るように(1)における「だって」は逆接の意味を持ち「でも」と代替可能であるとされてきた。

A. Maynard (1993) は「だって」に But の意味と Because の意味を認めている。

B. 蓮沼 (1996) は、「[PなぜならQだから] といった理由説明の関係づけ機能を基底に有する。コンテクストに対立が顕在・陰在する場合には [OしかしPなぜならQ] といった、3項の関係づけがかかわる」としながらも、「でも」と「だって」のあいだの互換性を認めている。

- (1) a. A: 少し休暇をとろうと思っているの。
B: でも/だって先週とったばかりでしょ?

(But, you took a vacation last week, haven't you?)

(Maynard, 1993)

b. A: 早く寝なさい。

B: でも/だって, この映画, 面白いんだもん。

(蓮沼, 1996)

c. A: 私やっぱり, 行くのやめとくわ。

B: でも/だって, あんなに行きたいって行っていたじゃない。

(蓮沼, 1996)

以下の議論では, 論述の都合上, 逆接の意味を持つとされてきた「だって」を「だってb」, そして, 理由付けの意味を持つとされてきた「だって」を「だってr」と呼ぶことにする。

また, 次の2点を疑問点として挙げておこう。

- (i) 「だってb」は「でも」と本当に代替可能なのだろうか。
- (ii) 「だってb」に逆接の意味があると解釈されてきたのは何故か。また, その解釈はどこから生まれたのか。

これらの疑問に対して, 本稿では, 以下のいくつかの観察と分析から, 次の(i)から(iii)の主張が正しいことを論証する。

- (i) 「だってb」の語彙的意味は「だってr」と同様, 「理由付け」である。従って, 「だってb」は「だってr」の一つの用法である。
- (ii) 「だってb」に逆接的意味があるという誤解は対話における先行発話を否

定する、あるいは、先行発話に疑念をはさむ言明が顕在的言語表現として発話中に表現されないことにより発生する。従って「だって」を含む発話を持つ、逆接的意味は「だって」という語彙それ自体に由来するのではなく。先行発話を陰在的に否定する対話間文脈 (dialogical context) である。

(iii) 「だって」と「でも」はいかなる文脈でも互換可能ではない。

本稿は、4つの章から構成されている。1章では、何故、対話中の「だってb」と「でも」が互換であると解釈されるのかについて、その背景を考察する。次に、2章では、(A)「だってb」と「でも」は対話配列 (Dialogical distribution) において相補分布をなすことから互いに排他的関係にあることを論証するとともに、(B)「「だってb」は「だってr」の一種ではない」という仮説が正しくないことを論証することにより、「だってb」は「でも」とは互換でなく「だってr」の一つの用法であることを論証する。3章では、日英比較の観点から2章までの議論を検証する。最終に、4章は当座のまとめにと今後の展望に当てる。

1. 観 察

まず、何故 (1 a) の対話中の「だってb」と「でも」が互換であると誤認されるのか。その背景についての考察をしてみよう。

(2) A : 少し休暇をとろうと思っているの。

B : でも / だって、先週とったばかりでしょ？

対話(2)において、Aの発話は、この対話の開始 (initiation) の発話である。一方、Bの発話はAの発話に対する返答 (response) の発話である。ただし、第2の発話者はその発話において、(3)のような会話の含意を意図的に表している。

(3) a. そんな無理を言ってはだめよ。[発語内否定 : Modality + Not-Force]

(You must not/had better not say that P.)

- b. あなたは休暇をとれないわ。[命題否定：Not-Modality]

(It is not possible that P.)

- c. 休暇を取っちゃだめよ。[命題否定：Not-Modality]

(You must not P.)

- d. だめじゃないかなあ。[信念否定：Not-Belief + Modality]

(I don't think it possible that P.)

あなたが休暇をとるのは無理だとおもうけどなあ。

[信念否定：Not-Belief + Modality]

(I don't think it possible that P.)

(3)より観察できることは、Bの「でも／だって」に後続する発話によって会話上含意される命題はAに対する命題否定でも、発語内否定でも、あるいは信念否定でもありうるということである。その場合、発語内否定の場合はAの発言が適切ではないという予備条件を持つ。従って、Bの発話がAの発話に対して逆接的連鎖をしているように見え、Bの発話の先頭にくる接続詞「でも」と「だって」は共に逆接の接続詞として機能し、かつ、逆接の意味を辞書的に持っているとして解釈されたのであろう。

あわせて、次の、2つの引用例を観察してみよう。

- (4) P：森のことか。

あれも弱ったが……まだこっちには火がついてないよ。

しかし、馬鹿な奴だ。

だいたい、お前があの男と手を切らないのがいかん。

- Q：だって、向こうが勝手にまとわりつくでしょう。

うっかり怒らせれば、それこそパパに迷惑かけるかもしれないわ。

- P：もう迷惑はかかっているよ。

(齋藤栄, 1997: 17, 太字, 対話表記は久保)

(5) P: 三浦さんの研究さ。

このあいだ、ちょっと言ったように、三浦さんは自分が甲州で発見した古文書を解読したわけだよ。

あれが事実なら、これは国文学史上、大変なレボリューションを起こしたことになるんだ。

Q: だって……。

〈事実なんでしょ〉と敦子は言いかけた。

(齋藤栄, 1997: 300, 太字, 対話表記は久保)

この場合、(4)(5)の発話Qの「だって」に後続する発話は、それぞれ、「私が悪いのではなく、私に勝手につきまとう森が悪い」、「あなたは「事実じゃないかもしれない」と言うけれど、事実でしょう」のように先行者の発話者の発話が適切ではないという予備条件を持つ。従って、(4)(5)の「だって」は「だってb」と解釈できそうに見える。しかし、そのような予備条件があるからといって、その事実のみによってこれらの「だって」を「だってb」と解釈することは適切であろうか。あくまでもこの予備条件は、「だって」が「だってb」であるための必要条件にすぎないのである。

2. 分 析

2.1 分 析 1

まず、従来の「だってb」の分析に従い仮説(6)をたてる：

(6) 仮説：「だってb」は「だってr」の一種ではない。

もし、この仮説が正しければ、従来の分析に手を加える必要がないのである

が、もしこの仮説が適切ではないことが証明されれば、逆に「だってb」は新しい分析を必要とすることになる。(背理法)「だってr」はそれに先行する発話として必ず「だってr」に後続する発話によって理由付けを必要とする発話を少なくとも一つ取る。もし従来から「だってb」であると解釈されてきている「だって」が、「だってr」でないならば、そのような「だってr」であるための条件(必要十分条件)を満足しないはずである。(4)(5)の「だって」の前には、それぞれ、「そんなこと言たって、悪いのは私じゃないわ。悪いのは森よ。」と「どうして「事実なら」なんて事実じゃないかも知れないという含みを持たせて発言をするの。」に類する意味の発話が陰在的に存在する。(4')(5')を参照されたい。

(4') P: 森のことか。

あれも弱ったが……まだこっちには火がついてないよ。

しかし、馬鹿な奴だ。

だいたい、お前があの男と手を切らないのがいかん。

Q: 悪いのは私じゃないわ、森よ。

だって、向こうが勝手にまとわりつくでしょう。

うっかり怒らせれば、それこそパパに迷惑かけるかもしれないわ。

P: もう迷惑はかかっているよ。

(斎藤栄, 1997: 17, 下線部, 太字, 対話表記は久保)

(5') P: 三浦さんの研究さ。

このあいだ、ちょっと言ったように、三浦さんは自分が甲州で発見した古文書を解読したわけだよ。

あれが事実なら、これは国文学史上、大変なレボリューションを起こしたことになるんだ。

Q: どうして事実じゃないかもしれないなんておっしゃるの。おかしい

わ。

だって……。

〈事実なんでしょ〉と敦子は言いかけた。

(齋藤栄, 1997: 300, 下線部, 対話表記は久保)

(4)(5)は(4')(5')と発語内的にも命題論理的にも同一の対話行為である。両者の違いは、発話Qの会話上の含意が(4)(5)では陰在的であるのに対して、(4')(5')では返答発話として顕在化されているという点である。同様のことは、先行研究で、「だってb」の典型例として取り上げてきた(1)についても当てはまる。(7)を参照されたい。

(7) ? a. A: 少し休暇をとろうと思っているの。

B: だって, 先週とったばかりでしょ?

だから, そんな無理を言ってはだめよ。

b. A: 少し休暇をとろうと思っているの。

B: そんな無理を言ってはだめよ。

だって, 先週とったばかりでしょ?

従って、このような観察から、「だってb」は「だって」が「だってr」であるための条件を満足することになり、仮説(6)は適切ではないことが証明された。

2.2 分析 2

2.1では「だってb」が「だってr」と同じ性質を持っていることを示したが、ここでは、「だってb」が「でも」とは互換でないということを、(1)対話配列上の互換性、(2)「だってb」が対話結合子か否か、の2つの観点から論証する。

2.2.1 対話配列上の互換性

(8)(9)の対話は、ともに先行の発話者が「これまでにどれだけ休暇をとったか」についての第2発話者の確信的知識を、「だってb」と「でも」を含むBの発話で顕在的に表現している。(8)では、発話Bは発話Aにたいする肯定的返答を会話上含意している。一方、(9)では、発話Bは発話Aにたいする否定的返答を会話上含意している。従って、後続の発話において、それぞれ、肯定的返答と否定的返答が顕在的に遂行されている場合と矛盾しない。もし、逆に(8)の第2の発話において否定的返答が、そして(9)の第2の発話において肯定的返答が顕在的に遂行されるとすると発語内矛盾が生じる。(8')(9')を参照されたい。

(8) a. A: 少し休暇をとろうかなあ。

B: だって、ずっととってないんでしょ?

A: うん。

B: それならとったら?

b. A: 少し休暇をとろうかなあ。

B: でも、ずっととってないんでしょ?

A: うん。

B: それならとったら?

(9) a. A: 少し休暇をとろうかなあ。

B: だって、この前もとったわね?

A: うん。

B: それなら遠慮したら?

b. A: 少し休暇をとろうかなあ。

B: でも、この前もとったわね?

A：うん。

B：それなら遠慮したら？

(8')*a. A：少し休暇をとろうかなあ。

B：だって、ずっととってないんでしょ？

A：うん。

B：それなら遠慮したら？

*b. A：少し休暇をとろうかなあ。

B：でも、ずっととってないんでしょ？

A：うん。

B：それなら遠慮したら？

(9')*a. A：少し休暇をとろうかなあ。

B：だって、この前もとったわね？

A：うん。

B：それならとったら？

*b. A：少し休暇をとろうかなあ。

B：でも、この前もとったわね？

A：うん。

B：それならとったら？

(8)から(9')を観察する限りにおいては、「だってb」と「でも」は同様のふるまいをする。しかし、「とりたきゃとったら」のように、これから先の行動についての決断を聞き手の自由意志にゆだね、話者自身は聞き手のその決断に関与しないことを宣言する発話が返答者の発話において顕在的に遂行された場合、

「だってb」と「でも」は相補分布をなす。(10)(11)を参照されたい。

(10) a. A: 少し休暇をとろうかなあ。

B: とりたきゃとったら。

だって, ずっととってないんでしょ?

A: うん。

B: それならとったら?

*b. A: 少し休暇をとろうかなあ。

B: とりたきゃとったら。

でも, ずっととってないんでしょ?

A: うん。

B: それなら (迷うことなんでないわ)

とったら?

(11) *a. A: 少し休暇をとろうかなあ。

B: とりたきゃとったら。

だって, この前もとったわね?

A: うん。

B: それなら遠慮したら?

b. A: 少し休暇をとろうかなあ。

B: とりたきゃとったら。

でも, この前もとったわね?

A: うん。

B: それなら遠慮したら?

同様に、「よしなさいよ」のように、聞き手があらかじめ取ろうと考えていたこれから先の行動についての決断にたいして、話者の否認的指示の発話が顕在的に遂行された場合も、「だって」と「でも」は相補分布をなす。(12)(13)を参照されたい。

(12) *a. A : 少し休暇をとろうかなあ。

B : よしなさいよ。

だって、ずっととってないんでしょ？

A : うん。

B : それならとったら？

b. A : 少し休暇をとろうかなあ。

B : よしなさいよ。

でも、ずっととってないんでしょ？

A : うん。

B : それなら (迷うことなんてないわ)

とったら？

(13) a. A : 少し休暇をとろうかなあ。

B : よしなさいよ。

だって、この前もとったわね？

A : うん。

B : それなら遠慮したら？

*b. A : 少し休暇をとろうかなあ。

B : よしなさいよ。

でも、この前もとったわね？

A：うん。

B：それなら遠慮したら？

以上の観察から「だってb」と「でも」は対話配列上互換ではないことがわかる。

2.2.2 「だってb」は対話結合子か？

(14)(=7) ? a. 少し休暇をとろうと思っているの。

だって、先週とったばかりでしょ？

だから、そんな無理を言ってはだめよ。

b. 少し休暇をとろうと思っているの。

そんな無理を言ってはだめよ。

だって、先週とったばかりでしょ？

(15) a. A：少し休暇をとろうと思っているの。

B：でも、先週とったばかりでしょ？

だから、そんな無理を言ってはだめよ。

*b. A：少し休暇をとろうと思っているの。

B：そんな無理を言ってはだめよ。

でも、先週とったばかりでしょ？

(14)(15)の対話において、第2発話者が発話連鎖において、「でも」をとるか、「だって」をとるかで、(3)の含意が発話として明示的に表現される位置は異なってくる。自然な、対話の運びの中では、「だって」が選ばれる場合には、(14 b)に見られるように(3)の言明は「だって」に先行する。その場合、第2発話者の発話

連鎖は理由付け関係にあるというその事実によって (*ipso facto*) 互いに (発語内的に) 矛盾しない, あるいは, 両立する (*consistent*)。一方, 「でも」が選ばれる場合には, (14 a)に見られるように(3)の言明は「でも」に後続する。その場合, 「でも」で結合される対話関係にある複数の発話は逆接関係にあるというその事実によって互いに (発語内的に) 矛盾する, あるいは, 両立しない (*inconsistent*)²⁾ また, それらと逆の位置に(3)の発話が生じると(14 a) (15 b)に見るように不自然な対話ができあがる。

以上の観察から, 「だって」は理由付けの言明を後続発話として要求し, 後に否定の言明をとることはできないことがわかる。また, 逆に, 「でも」は理由付けの言明を後に否定の言明を取ることがわかる。しかも, 後者は, 理由付けの言明と否定の言明の間に因果関係 (理由とその帰結の関係) が成立する。それらを図式すると(16)のようになる。

- (16) a. 否定の言明—「だって」—理由付けの言明
 b. 「でも」—理由付けの言明—否定の言明

また, このことは, (17 a)のような, 一見, 第2の発話者による否定の言明が, 第1の発話者の言明に対する否定や反駁でないように見える対話についても当てはまる。

- (17) a. A: どうしてお母さんの言うことを聞かないの。
 B: だって/*でも, 僕もう子供じゃないもん。
- b. A: お母さんの言うことを聞きなさい。
 B: いやだ!
 だって/*でも, 僕もう子供じゃないもん。

(17 a)のAの発話の第1義的発話内行為は命令であり、質問ではない。いわば、(17 a)のAの発話は(7 b)のAの発話をその非字義的意味として持つ。従って、(17 a)も(17 b)の解釈のもとでは(8)の図式に当てはまる。

そこで、(16)の図式を関数的にとらえると「だって」は純粹に対話をつなぐ対話結合子(dialogical connective)ではなく、単一話者による否定の言明とその理由付けの言明を結ぶ発話結合子(speech act connective)ということになる。しかも、それらの発話は理由付け関係にあるというその事実によって(*ipso fact*)互いに(発話内的に)矛盾しない、あるいは、両立する(consistent)。一方、「でも」は対話において逆接関係にある複数の発話を結ぶ対話結合子である。しかも、それらの発話は逆接関係にあるというその事実によって互いに(発話内的に)矛盾する、あるいは、両立しない(inconsistent)¹⁾

以上を、形式的に表すと(18)のようになる：

(18) a. 「だって」 \Rightarrow datte'($F_1(P), F_2(Q$ [+reason]) $\wedge(F_1(P)\wedge F_2(Q))$)

b. 「でも」 \Rightarrow demo'($F_1(P)_{1\alpha}, F_2(Q)_{R\beta}$) $\wedge(\neg(F_1(P)\wedge F_2(Q))$)

以上の観察と分析から、従来「でも」と互換性があるとされてきた「だって」は対話結合子ではなく、対話結合子である「でも」とは文脈の上でも互換性がないことになる。このことは、蓮沼(1996)の分析のうち「だって」が[OしかしながらPなぜならQ]とした3項の関係付けが妥当ではないことを示す。

3. 日英比較の観点からの検証

ここでは、2章までの議論を、日英比較の観点から検証する。以下、「だってb」がbutと訳出される場合と、それ以外に訳出される場合とに分けて議論を進める。

3.1 「だってb」が but と訳出される場合

従来逆接の意味を持つと解釈されてきた「だって」は(19), (20), (21)のように、英文では but と訳出されることが多い。しかし、だからといって、それらの but が純粋な逆接の意を表すものと解釈してよいのであろうか。

(19)

Bride: もおっ! いいかげんにしてよ!

一曲決めるのに何時間かかるの!?

Groom: だって、僕たちの 大事な 披露宴 だよ。

But I/me-(plural)'s important wedding reception is (emph.)

("But this is our once-in-in-a-life-time wedding reception we're talking about.")

(星里, 1994: 20-: 21)

この「だって」は先行の発話に対する強い抗議を代弁しており、「時間をかけて何が悪い、かかったっていいじゃないか」という含みを持たせている。従って、逆接の「だって」とみなされてきた種類の「だって」である。しかし、後ろに、「僕たちの大事な披露宴だよ」という反論の理由を表す理由節を導いている。また、上記の含みは「だって」に先行する陰在的な命題である。従って、この「だって」が but と訳出されているからといっても、単純に、逆接の「だって」であると解釈するのは適切ではない。

次の例も同様である。

(20)

Sanae: 毎日いろんな新郎新婦見てるけど、大丈夫なのかなこの人って、つい思っちゃう。

Kakieda: ばーか。毎日他人のことでそんなに心配してたら胃に穴あくぞ。

Sanae: **だって**, できればみんな幸せになってほしいもの。

but if possible everyone happy to want [them] to become **because**
(**But, if it was possible, I really would like them all to become**
happy.)

Kakieda: ほほう。以前の見城なら、とにかく結婚なんかばかげてる、でおわつたろうになあ。

(星里, 1994: 30-: 31)

but 自体も多義で、逆接の意のみではない。「だって」の訳語として用いられている but は単純な逆接の意味ではなく、むしろ逆接的意味が希薄化した例であると考えerほうが適切である。『漫画人: 31』ではこの箇所の「だって」を but と訳出しているにも関わらず、*“Datte is often used in colloquial speech to introduce further elaboration or explanation, especially of a defensive nature (page. 31, 太字は久保)”* という注釈をつけている。次例で、「だって」を *“But, (it’s because)”* と訳出しているのも同様の理由によるものと考えられる。

(21)

Roppeita: なんだいジジくさいこと言っちゃって! (What do you mean by saying such an old-geezer thing?)

Sound FX: ガポ (Gulp)

Kanamori: **だって**ジジイだもの。(“**But, (it’s because)** I am an old geezer.”)

(Mangajin 35, 1994: 35)

3.2 「だってb」が but ではない表現に訳出される場合

以下の例では、but ではなく、“How can you say that !”, “Well” が用いられている。まさに、従来逆接の「だって」とみなされていたものが、逆接で

ない解釈で翻訳されている場合である。以下の2つの例では、「だって」が用いられている文脈を明らかにする狙いで、和文・英文ともに作品よりの引用部分を簡略化しないで載せておく。

(22)

桜子：「どうして、不倫なんか、したんですか？」

章子：「私は……」

章子さんは、カップをおいて、白いきれいな指を、ひざの上で組み合わせた。

「不倫だとは、思わなかったの」

桜子：「だって！」

おもわず、声のトーンがあがってしまう。

「奥さんや、子供のいる人とつきあうのが、不倫なんでしょう？」

章子：「そう……ですよね。でも、最初は、そうは思わなかったの」

(折原みと, 1998: 118)

桜子の「だって」は「それっておかしいわ。だって、……」でやはり先行の章子の発話を否定した上で、「奥さんや、子供のいる人とつきあうのが、不倫なんでしょう？」という理由を表す発話を後に導く接続表現である。そして、明示的には、「だって」に先行する否定文は現れていないので、見かけ上は、「だって」は対話接続詞になっている。

英文ではこの部分は下に見るように、“**How can you say that?**”と翻訳されている。そして、この文は、“**You can't say that!**”を反語的に含意していることは言うを待たない。

(23)

Sakurako: "Why did you begin an affair that was so immoral?"

Akiko: "I..."

Akiko put her cup down, and entwined her exquisite white fingers on her lap.

"I didn't consider it immoral."

Sakurako: "How can you say that?"

I couldn't help the rising tone in my voice.

"Isn't it immoral to go out with someone who has a wife and child?"

Akiko: "I suppose so. But I didn't think so at first."

(Orihara, M, 1991: 94)

(24)

リョウ: 「パートのおばさん天使たちがね、みんなで雪の素の紙を切って、雲の上から降らしてるんです」

桜子: パートのおばさん天使が?

白い紙を、ハサミでチョキチョキ切って?

「おはーっ」

想像したら、思わずふいちゃった。

だって、それじゃまるで、学芸会の裏方さんじゃないの。

リョウ: 「あっ、信用してませんね。」

リョウくんが赤くなる。

桜子: 「だって……あ」

そのとき。

地上から、教会の鐘の音が聞こえてきた。

(折原みと, 1988: 130)

桜子の「だって……あ」は「信じられないわよ。だって。」でやはり先行のリョウの発話を否定した上で、あとに理由を表す発話を導く接続表現である。ただし、この例では、理由を示す節は、突然の新たな事態の展開のためにとぎれている。また、明示的には、「だって」に先行する否定文は現れていないので、見かけ上は、「だって」は対話接続詞になっている。

英文ではこの部分は下に見るように“**Well...**”と翻訳されている。この“**Well...**”は躊躇を表すから、先行の発話がにわかには信じがたいという否定的含意を持っている。

(25)

Ryo: “This is also one of the angels’ jobs.”

Sakurako: “Really?”

Ryo: “Part-timers—Angels who are middle-aged women—cut snow paper into little tiny pieces and let them flutter down from the clouds.”

Sakurako: Middle-aged women who were angels? And they worked part-time? They cut white paper with scissors? I couldn’t help bursting out laughing at the very thought. They must be just like the stage hands at a school play.

Ryo: “You don’t believe me.”

Ryo turned red.

Sakurako: “**Well...I...**”

Just then...

The sound of church bells ringing came to me from the ground.

3.3 感嘆表現としての「だって」

若い女性の日常会話では感嘆表現としての「だって」がよく用いられる。下記の例で、OLの「だって」は「困ります、だって」でやはり先行のManagerの発話を否定した上で、あとに理由を表す発話を導く接続表現である。一方、「えーっ! (=でも!)」は「困ります、でも」とは続かない。

(26)

Manager: "Deliver this, please!"

OL: "B-But!" (えーっ!)

Manager: "No buts." (えーっじゃない!) (えーっ=でも*)

OL: "W-Well!" (だってェ!)

Manager: "No wells!" (だってェじゃない!)

OL: "A-All rights!"

OL wears a mask pretentiously as if she had hay fever.

Manager: "Sorry, I didn't know you had hay fever,"

(Akizuki, R, 1990: 85, Underlined part is mine.)

3.4 ま と め

以上、3章では日英比較の観点から、(i)「だってb」はその前に、先行の発話者の発話を否定的にとらえる発話を陰在的に持つと同時に、後にその理由を示す理由節をとる³⁾(ii)従って、「だってb」は「だってr」の一種である」という2章までの議論が適切であることを傍証した。

4. 当座の結論と今後の展望

さて、今まで2章で示した私の分析では次の四点を論証した：

[1] 「だってb」は「だってr」であるための必要十分条件を備えている。

[2] 「だってb」は「でも」と対話配列上の互換性を持たない。

[3] 「だってb」は「でも」と異なった発話の意味を持っている。故に、両者の間には意味的互換性はない。

[4] 「だってb」は「でも」と違って対話結合子ではない。

そして、以上の論証の結果、「だってb」が「だってr」の一種であることを証明した。

ところで、これまでの本稿での分析、とくに第四のものは、「だってb」と「でも」が対話結合子であるか否かという2項対立的視点で行ったものであった。しかし、文法化の視点でこの問題を捉え直すとどんなことになるであろうか。例えば、もし仮に母国語話者の中に、「だって」にも「でも」同様対話結合子としての機能を認める人がいるとすればどのような説明を必要とするであろう。まず、その事実は私の分析が誤っていることを意味するものではない。そうではなくて、文法化の視点からすると、2項対立による分析は、これらの結合子の典型例(prototype)の分析ということになるのである。今問題のケースでは、その人の日本語認知体系の中で「だって」の用法の一部が限りなく「でも」に近づいている、あるいは、「でも」に同化していることを意味する。その場合、おそらく、対話文法の範疇から見ると(27)のような文法化の方向が存在することが推定される。

(27) 発話結合子 ⇒ 対話結合子

このことは、従来から理由付けの「だって」とみなされてきた「だって」が発話結合子と対話結合子の両方の文法機能を持っていることとも矛盾しない⁴⁾。ところで、何がそのような文法化を許しているのであろうか。今の所、筆者は、言語化されない陰在的発話にたいする母国語話者の認知的価値付けの違いによるものであると考えている⁵⁾。当然、非字義的発話にも関わることであるから、言語表現、非言語表現、さらに非言語化表現にたいする対話者の知覚力や認知力も問題になって来よう、しかし、このことは、当面は類推の域をこえないもの

である。この点の解明は今後の研究に委ねたい。

総じて、「だって」は理由付けを求める発話が陰在的な場合は、発話結合子としての機能しか持たない。一方、それが顕在的な場合は発話結合子と対話結合子の両方の文法機能を持つ。

acknowledgement

本稿は、松山大学学術研究国際交流助成制度による支援を得て行うことができた。

また、本稿をまとめるに当たって Québec 大の Daniel Vanderveken 氏、Brighton 大の Ken Turner 氏から有益なコメントを頂いた。記してお礼としたい。

Notes

- 1) 発話内矛盾については Vanderveken (1990, 1994) を参照されたい。
- 2) 単一発話者による逆接関係にある複数の発話を結ぶ場合もある。その場合は、発話結合子である。
- 3) 次の例の「だって」には、「その通りよ」という先行の発話の命題内容を肯定する命題が含意されるから、一見反例に見えるが反例ではない。なぜならば、同時に、「でも、どうしてそんなこというの？」相手の発話の意図が理解できず、それを否定しようとする発話の意図が含意されているからである。さらに、「だって」には理由節が後続している。

Princess: いつも誰かが、私がどんな気持ちなのか教えてくれるから、それが私の気持ちなのよ。

(Usually someone tells me how I feel, and that's how I feel.)

Flog: フーン、誰かがキミに考えを教えれば、それが君自身の考えになっているってわけだな。

(Yeah, and I suppose someone tells you how to think, and that's how you think.)

Princess: だって、もちろんみんながそうなんじゃないの？

(Why, of course. Isn't that everyone does?)

(Active English 編集部編, 1989: 14-16)

4) 理由付けの「だって」:(a)(b)(c)の観察から、(a)(c)では「だって r」は単独の発話連鎖を、また、(b)では、複数の発話者の対話を結びつけていることがわかる。このことから、「だって r」は、発話結合子と対話結合子の両方の文法機能を持っていると考えることが出来る。

(a) A: 少し休暇をとろうと思っているの。だって働きすぎるのはよくないって、みんなが言うのよ。

(Because everyone tells me working too hard is not good.)

(b) Q: 「田辺さんはそのヤクザと関係があるんじゃないかと思うけど、ちがうかしら？」

P: 「どうして？」

Q: 「だって、それ以外に、秘密の洩れようがないでしょ」

(斎藤栄, 1997: 98, 対話表記は久保)

(c) Q: 「月曜日はどこも行かなかったわ。ずっとテレビを見てた」

P: 「嘘をつくなよ。横浜駅西口の『水月』にいたろう」

浜島刑事が咄嗟に言った。初美は怪訝な顔だった。

Q: 「『水月』って？ なんなの？」

P: 「そこで姫鱒とトンブリを食ったじゃないか。田辺といっしょに」

浜島がたたみかけたのは、心理試験のつもりである。だが、残念ながら反応はゼロだった。

Q: 「あら……わたしが嘘を言っていると思ってるのね。二十三日のことなら忘れないわよ。だって、わたし、あの日にお客さんが来たのよ。だから外出しなかったんだもの」

(斎藤栄, 1997: 143, 対話表記は久保)

5) Scollon, R. and Scollon S. W. (1995, 1-2) では東洋と西洋では Discourse representation の順序が異なり、東洋では Because of Y(topic, background, or reason) X(comment, main point, or action suggested) の順序を取り、西洋では逆に、X(comment, main point, or action suggested) because of Y(topic, background, or reason) の順序を取るとしている。

引用作品一覧

秋月りす 『OL進化論』, 1990。

(Akizuki, Risu, *The OL Comes of Age* (translated by Y. Tamaki; annotated by J. Yoshida), Kodansha/Kodansha International, 1994)

Active English 編集部編 『コミックで覚える生きた英会話』, アルク, 1989。

折原みと 『夢見るように, 愛したい』, 講談社, 1998。

(Orihara, Mito *Dreaming of Love* (translated by Y. Tamaki; annotated by K. Isa), Kodansha/Kodansha International, 1991)

鷹屋哲 「美味しんぼ」, 『ビッグコミックス』, 小学館 1996, No. 52.

くぼた尚子 『フラットな彼女』, 祥伝社, 1993。

星里もちる 『結婚しようよ』, 小学館, 1994。

(Hoshisato, Mochiru, *Let's Get Married* (translated by *Mangajin*), Mangajin.

Mangajin 'Mangajin's Basic Japanese through Comics', *Mangajin* 35, 1994.

References

Brassac, C. and A. Trognon

1997 "Speech act theory and the logic of intercomprehension—Intercomprehension and cognition," mimeo.

Cheetham, Dominic

1996 'Topic-Function, Topic-Content,' in *Lingua* 7, Sophia University.

Coulthard, Malcom

1976 *An Introduction to Discourse Analysis*, Longman.

Davis, Steven

1997 "Utterance acts and speech acts," in mimeo.

Dominicy, M and F. N. Franken

1997 "Speech acts and Relevance theory," mimeo.

蓮沼昭子

1996 「談話接続詞「だって」と「でも」について」, 第21回関西言語学会シンポジウム『ディスコースをめぐる』。

Kasper, G and S. Blum-Kulka

1993 *Interlanguage Pragmatics*, Oxford.

Moeschler, Jacques

1997 "Speech act theory and the analysis of conversations—Sequencing and interpretation in pragmatic theory," mimeo.

Maynard

1993 *Discourse Modality*, John Benjamins.

Scollon, R. And S. W. Scollon

1995 *Intercultural Communication*, Blackwell, Oxford.

Smith, N. V. (Ed.)

1982 *Mutual Knowledge*, Academic Press.

Tannen, Deborah

1993 *Framing in Discourse*, Oxford.

Taylor, Talbot J.

1992 *Mutual Misunderstanding*, Routledge.

Tsui, A. B. M.

1994 *English Conversation*, OUP.

Vanderveken, Daniel

1990 *Meaning and Speech Acts*, Cambridge University Press.

1994 *Principles of Speech Act Theory*, Université du Québec a Montreal.